



Title	10. ピアサポーターの思い : (2)かつての非利用者からみたピアサポート室
Author(s)	春名, 恭太朗
Relation	北海道大学ピアサポート活動報告書 (平成28年度版) p. 60-61
Issue Date	2017-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65089
Type	report
File Information	10HokudaiPeerSupport_H28-02.pdf



私は考える。時に一人反省会も開く。開きながらも次はどうしようか考えたり、あいさつは欠かさないでおこうと思ったり、そういう小さなことから始めていけばいいのではないか。脱皮のごとく変わることはできないけれども、些細な心遣いから利用者さんとの交流が図っていけるのではないかな…。これが一年間の活動を通して気づいたことである。人によってはなんだ、そんなことかと思うかもしれないが、これが意外と重要である。来年度は、ほんのちょっと思い切ってみる、そんな気持ちで活動していきたい。

(2) かつての非利用者からみたピアサポート室

春名恭太郎¹

1. はじめに

筆者は、ピアサポーターとなる以前には 1 度もピアサポート室を利用していなかった。他のサポーターのほとんどが元々利用者である中、サポーターの公募を目にして応募したことをきっかけに、はじめてピアサポート室にかかわるようになった。

通常、どのような機関でも活動の報告書にその機関を利用しなかった立場から記述がなされることはないと思われるが、あえて本稿では利用しなかった立場から本ピアサポート室の活動を分析し、ピアサポート活動の室外への発信について再考していく。

2. 本論

2.1. 利用方法について

ピア外部の人にとって、サポーターがどのような活動をしているのかがはっきりとはわからない状況にあるといえる。

初めて使う際は、利用時に声をかけなければならないのか、かけなくてもいいのかわからなく、使い方がわからないと利用に踏み出しづらいと思われる。見知らぬ人ばかりの空間に入っていくのには敷居の高さを感じる学生も存在し、筆者自身、この理由によりピアサポート室を利用しなかった、できなかったといえる。

また、外から見ただけでは利用用途がわかりにくく、サポーターもどのようなことをする人かわからなかった。例えば、他の機関のスタッフの業務内容はその場にいるスタッフが利用者に対し行う業務は、学生相談室であれば学生からの相談への対応、図書館であれば、利用者への図書の貸出や資料調査の支援といったことで、その機関の名称等からその機関を利用せずとも容易に推測が可能である。これに対しピアサポーターは、その名称からはどのようなことを行うスタッフなのか機関の名称から推測することは難しいと思われる。

また、他の機関では学生が自発的に相談するのを受け身的に待ち、対応する業務内容とな

¹ 北海道大学文学部 3 年

っている。これに対しピアサポーターは受け身的な相談の体制は取りつつも、学生に対し能動的に会話をしに利用者のもとへ行くこともある。これは他の学生支援機関には無いスタッフの行動である。能動的に相談することが得意でない学生にとっても、このピアサポート室は気軽に自分の悩みなどを相談できる場になっていると思われる。ピアの存在意義もこの積極的な、学生への支援の可能性にあるのではないかと思われるが、同時にこのような他の相談窓口にはない体制をもつ場であることを周知する必要があると思われる。

2.2. 利用目的について

本ピアサポート室の場合、使用目的を制限していないため各利用者は、自習や他の利用者との会話、昼寝など思い思いの行動をバラバラに行っている。そのため、利用したことのない学生にとって外からでは今一どのような用途で使用する部屋なのかわからないのが現状である。

なかでも自習スペースとして使用する利用者は一定数存在しており、部屋の外から室内の様子を覗くと自習している学生の姿が目に入るという状況である。名目上フリースペースとなっているが、外からの見た目では自習が主な使い方であると見えうる状況である。自習スペースは隣接する図書館や講義棟にも複数箇所設置されており、自習スペースとしての需要は限定的であると考えられる。また、ピアサポート室はサポーターの目が常にある空間であり、誰かに見られている感覚がある中で勉強等を行うことになる。サポーターや他の利用者の話し声や室内でかけている BGM がなく静かな環境で勉強したい学生は利用しようとは思わない可能性も考えられる。そのため、自習がピアサポート室利用の主目的だった学生は自習以外の用途でもピアサポート室を利用しない可能性がある。

しかし、図書館等では他の学生と関わることは無く、また何か困ったことや相談したいことが出てきたとしても誰かに相談することは出来ない。これに対し、ピアサポート室はフリースペースであると同時に相談窓口の性格を持つ場である。本学内において特に学部 1 年生の段階で、気軽に学生に対し相談できる場というのは機関としてはピアサポート室に限られるのではないか。その中で、利用目的が分からず利用できない学生がいた場合、利用目的の広報が重要になってくるのではないか。

3. 結論

本稿は未利用者の心理状況进行分析したものであり、具体的な方策については言及することが出来なかった。また、前述の分析はあくまで筆者の主観によるものであり、未利用者の中にもっと別なことを考えている学生がいる可能性は十分にある。その上でもピアサポート室の利用については、ピアサポート室でどのような支援が受けられるかが他の学生に伝わっているかどうか重要となると考えられる。筆者自身どのような支援が受けられるか知っていれば、サポーターになる以前に利用していたと思われる。未利用者へのピアサポート室の活動内容の広報・周知が必要であると考えられる。